

し、義平も亦同じく腹側を突いた。政均乃ち踏跟として傍にあつた長櫃に倚つたので、沖太郎はその額を撃ち、續いて頸を斬つた。かくて二人はその目的を達したから、藩吏の指揮を得て一室に幽せられ、その懐中した斬奸状を提出した。この上書は今傳はらぬが、政均が奸賊の巨魁たるを以て敢へて誅罰したことを述べ、且つその徒村井長在・藤掛頼善・丹羽履信・木村恕・陸原惟厚・内藤誠・佐野鼎・安井顯比・關澤房清等も亦同じく國賊なるが故に、嚴科を以て之に當てられんことを請うたもので、二日集會の際茂助その草稿を齎し、賢三郎の淨寫したものであつた。

(三)本多家臣の緩撫—沖太郎等兇行の事あるや、藩吏本多氏が巨祿を受け、その臣隸數百人を有するが故に、彼等の動搖を恐れ、石川・河北二城門を鎮して警戒を嚴にした。是より先政均の女婿で一等上士であつた長九郎左衛門成連は既に登城して居たから、慶寧は之に懇諭を加へ、又本多氏の支族と家老とを召して藩知事の意を傳へしめ、更に薄暮執政前田直信・參政前田孝錫を遣はして、嗣子資松(後政以)に用辭を述べ、又遺領相續の命を傳へしめた。資松時に年六歳。横死者の後にして家名を斷絶しなかつたのは、實に破格の特典であつた。

(四)連累の處分—沖太郎・義平犯行の翌日藩は彼等の連累として多賀賢三郎・松原乙七郎・岡野悌五郎・菅野輔吉・岡山茂を捕へて刑獄寮に下し、沖太郎の父沖右衛門を親類預とし、岡野外龜四郎を東京より極致したが、獨首謀の一人土屋茂助は八月九日その家に自刃した。後本件の判決は四年二月十四日に至つて

成り、沖太郎と義平とは新律綱領に照らし、刑獄寮に於いて自裁を命ぜられ、菅野輔吉は三年間の自宅禁錮となり、多賀賢三郎・岡山茂・岡野悌五郎は七十日の閉門に處せられた。而して岡野外龜四郎と松原乙五郎とは無罪たり、石黒圭三郎は亦夙く東京に在つて、名を桂正直と改め、後歸藩自首したが、その罪本件に觸れることなしとせられ、別に脱藩の故を以て閉門九十日に處せられた。

**ホンダマサヒロ** 本多政寛 通稱正之助・主水、初諱政辰。政長の六男。初め本多氏の家臣となつて五百石を受けたが、寶永六年十二月政長老後の祿を襲ぎ、三千石を賜うて藩臣となり、人持組に列し、正徳元年定火消、享保十六年寺社奉行に任じ、元文四年十月七十四歳を以て歿した。

**ホンダマサフユ** 本多政冬 通稱長五郎・圖書。本多政長の四子。初め新知三千石を受け、後政長隠居の際その出免八千石を政冬に加増して一萬千石(内三千石與力知)となり、寶永二年若年寄、同年家老に進み、享保三年五月十九日享年六十九を以て歿。子孫世々家を襲ぐ。政冬字は仲貞・文峰又は龜居子・藏六窩と號し、政務の餘詩賦を弄した。

**ホンダマサミチ** 本多政通 加賀藩の老臣 本多氏の第十代。政和の嫡子。天保七年七月五日出生。初名乾松・主殿。弘化四年十二月八日家祿五萬石を襲ぎ、嘉永四年十二月廿七日從五位下周防守に叙任、安政三年十一月三日享年廿一を以て卒した。法號雲蓋院、野田山に葬る。

**ホンダマサヤス** 本多政康 通稱圖書・刑部・頼母。本多伊織政則の子で、圖書政恒の

養子となつたもの。遺知一萬千石を嗣ぎ、安永六年御家老に任じ、寛政九年閏七月隱居して閑隨と稱し、七白石を受け、十二年九月廿六日六十九歳を以て歿した。

**ホンダマサヤス** 本多政養 通稱貞五郎・勤解由。寛政九年閏七月家督一萬三百石を嗣ぎ、享和元年七月父圖書政康の隠居知七百石を併せ、享和三年御家老になつたが、才力巧辯を恃んで政治の害をなすを以て、九年之を除き、文政六年十二月廿六日三千石を減じて通塞を命ぜられた。後宥され、天保七年八月致仕して自省軒と號し、本高の内五百石を受け、九年四月七十四歳を以て歿。子孫世々藩に仕へる。

**ホンダマサユキ** 本多政行 加賀藩の老臣 本多氏第六代。實は政敏の弟政冬の子であつた。享保十三年十一月十四日出生。幼名左進・萬作・主殿。寛保二年三月廿六日政昌の養子となり、寛延元年八月六日その遺知五萬石を受け、二年正月七日從五位下安房守に叙任し、後に遠江守と改めた。寛政八年二月廿八日家を嫡子政成に譲り、隠居知二千五百石(内與力知)を賜ひ、悠々齋と號し、九年十一月廿三日享年七十を以て卒した。法號天章院、野田山に葬る。

**ホンダマサヨシ** 本多政昌 加賀藩の老臣 本多氏第五代。政敏の四子で、元祿二年四月を以て生まれ、幼名才一郎、次いで嘉藤次。享保八年八月兄政實の死に臨んで嗣となり、十二月六日遺知五萬石を相續し、九年正月元日從五位下安房守に叙任せられ、寛延元年三月十八日享年六十を以て歿した。法號萬機院、野田山に葬る。

**ホンダマチ** 本多町 金澤の町名。もと藩の老臣本多氏の下屋敷の地で、坊間に本多の家と呼んだが、明治四年四月戸籍編成の際新たに本多町と稱し、上・中・下に別かつた。

**ホンダヤイチ** 本多彌一 諱は政得。父政醇は藩の老臣本多政禮の三子で、政均の叔父であつたが、俸五百石を削いて別にか家を成したのである。嘉永三年彌一祿を襲ぎ、明治元年下つて宗家の臣隸となり、家老職に任ぜられた。人と爲り濃厚、經史に通じ武技を能くした。二年八月政均の横死するに及び、同志と共に復仇を志し、四年十一月廿三日岡野悌五郎を倒し、五年十一月四日自裁を命ぜられた。享年廿七。

**ホンチヨウ** 凡兆 金澤の俳人。通稱達壽。初號加生、一號は阿圭。その宮城氏・越野氏・野澤氏・宮部氏、又は名を長次郎といひ、所居を春花園と稱したとするの類、皆確證がない。初め醫を以て京都に遊び、俳諧は芭蕉の門に入つて頭角を露し、去來と共に猿蓑の撰者となつたが、一時罪を獲て投獄せられ、正徳四年春大坂で變死した。凡兆の妻とめは號を羽紅といひ、亦俳句を能くした。羽紅を去來の姉とする説もある。

**ホンチヨウケンセキセンジャコウ** 本朝群籍撰考者 一冊。鳩巢文集に延寶八年代賀人集一作と註して、此の書の序文が載せてあるが、今存するや否は明らかでない。著者も不明である。

**ホンチヨウジ** 本長寺 金澤蛤坂町に在つて、長遠山と號し、日蓮宗に屬する。初め年代不詳日祝といふもの之を越中木船村に建立し、前田利長の時守山に移り、尋いで富山に